

<日本神話>

神道や日本を理解するためには、日本神話を知っていなければならない。そこで、まず日本神話を紹介する。イザナギとイザナミの国造りからアマテラスの岩戸隠れ、三種の神器の謂われなど、日本人なら知っていて当然のことなので、簡単に紹介するつもりであった。しかし、どうも知らない人が多すぎるので、重要な部分だけではあるが、かなり詳細に説明する。なお、長くなるので、途中途中で解説＊を付記してある。

日本神話には、代表的なものとして、古事記と日本書紀（併せて「記紀」と言い、日本書紀が正史）の 2 種類がある。ここでは、最も代表的な古事記の内容を一部、紹介する。詳細は次を参照。（いろいろあるが、これが解り易くて面白い。）

<http://enkan.fc2web.com/kantan/index.html>

★天地創造

・この天地の中心に、最初に天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）が現れ、次に万物を生み出す力である高御産巢日神（タカミムスビノカミ）と神産巢日神（カミムスビノカミ）が現れた。この三柱（みはしら）の神は、みな独り神として身を隠した。

この頃の大地はまだ若く、水に浮く油のように漂っていたが、泥海の中からすくすくと生え出る葦の芽のように宇麻志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコジノカミ）が現れ、天を永遠に支える柱として天之常立神（アメノトコタチノカミ）が現れた。この二柱の神もまた独り神として身を隠した。

以上の五柱の神は、天と地の仕組みそのものであって、男でも女でもなく、実体もなく、人々の前に姿を見せることはなかった。よって、この五柱の神を別天津神（コトアマツカミ）と言う。

＊最初は三柱の三神。言うまでもなく、「生命の樹」の三柱に対応している。だから、神は 1 人 2 人とは数えず、「柱」と言う。

【峻巖の柱：神産巢日神、均衡の柱：天之御中主神、慈悲の柱：高御産巢日神】

また、葦というのも、葦＝パピルスで造った紙で有名なエジプトなどを連想させる。エジプトは、ヘブライの民が奴隷として居た場所である。

・こうして天と地が生まれると、次に国之常立神（クニノトコタチノカミ）が、続いて豊雲野神（トヨクモノノカミ）が現れた。この二柱の神もまた独り神として身を隠した。

以後、男女ペアの神々が何組も現れ始めた。泥や泥の中に立てる杭や杭の上に建てる家の神である。これらの神は実体を持っていて、それぞれ夫婦になっ

て次のペアの神を生んでいった。妹とは女性あるいは対であることを表す。

宇比地邇神（ウヒジニノカミ）と妹須比智邇神（イモスヒチニノカミ）。

角杙神（ツノグイノカミ）と妹活杙神（イモイクグイノカミ）。

意富斗能地神（オオトノジノカミ）と妹大斗乃弁神（イモオオトノベノカミ）。

於母陀流神（オモダルノカミ）と妹阿夜訶志古泥神（イモアヤカシコネノカミ）。

伊耶那岐神（イザナギノカミ）と妹伊耶那美神（イモイザナミノカミ）。

以上、国之常立神から伊耶奈美神までを、「神世七代（かみよななよ）」と言う。

＊三柱、五柱、七代で「七五三」を形成する。「七五三」とは、神々による国造りを人間の成長段階に当てはめたものである。

また神世七代は、創世記に於いて、7日間で天地創造が終わったことに対応している。

しかし、不思議なことに、正史である日本書紀では、例えば原初の三神は、次のように書かれている。

“天地が開けた初めに、国土が浮き漂っていることは、喩えて言えば、泳ぐ魚が水の上に浮いているようなものであった。そんな時、天地の中に、あるものが生じた。形は葦の芽のようだったが、間もなくそれが神となった。国常立尊（クニノトコタチノミコト）と申し上げる。次に国狭槌尊（クニノサヅチノミコト）、次に豊狭槌尊（トヨノサヅチノミコト）と、全部で三柱の神がおいでになる。この三柱の神は陽気だけを受けて、1人で生じられた。だから、純粋な男性神であられた”

内容的には同じであるが、神の名前が全く異なっている。これは、どういうことか？またこの三柱の神の中の国常立尊と豊狭槌尊は、古事記での国之常立神と豊雲野神に名前が良く似ている。特に、国常立尊と国之常立神は「クニノトコタチ」ということで一致しており、神話ではミコトと言ったり、カミと言ったりすることは、しばしばあることから、同一神である。

となると、古事記か日本書紀、あるいは両方が“嘘”と判断せざるを得ない。しかし、歴史上、古事記と日本書紀の目立った偽書議論があったわけではない。何故なのか？のつけから、これだ。とりあえず、先へ進もう。

★イザナギとイザナミによる国造り

・天津神たちは、この漂っている国土をあるべき姿に整え固めよ、とイザナギとイザナミに命じ、天の沼矛を授けた。そこで二神は天浮橋の上に立ち、沼矛で国土を搔きまわした。沼矛を引き上げると、沼矛の先から滴る潮（塩）が積もって島になった。これを淤能碁呂島（おのごろじま）と言う。

二神が淤能碁呂島に降りてみると、そこには天御柱（あめのみはしら）と八尋殿（やひろどの）があった。

イザナギ：貴女の身体はどのようにできているのですか。

イザナミ：私の身体はほぼ整っているのですが、足りない所が 1箇所だけあります。

イザナギ：私の身体は既に整っているのですが、それが高じて余った所が 1箇所だけあります。だから、私の身体の余った所で、貴女の身体の足りない所を挿し塞いで、国を生もうと思います。それでどうでしょうか？

イザナミ：ええ、結構ですわ。

イザナギ：それならば、私と貴女でこの天御柱のまわりを巡って出会い、寝所で交わりをしましょう。貴女は右から回って下さい。私は左から回りましょう。

そして、二神が柱を巡り会った時に、まずイザナミが声を掛けた。

イザナミ：まあ、なんて素敵な方なの！

イザナギ：ああ、なんて素敵な人なんだ！

二神はそのまま交わって子を生んだ。しかし、生まれた子は骨の無いグニャグニャの水蛭子（ヒルコ）と淡島（頼りない島）だった。二神は困り、天津神に相談した。すると、天津神は、女神が先に言葉を掛けたのが良くなかったのだ、と示唆した。そこで、再び二神は天御柱を廻り、今度は先にイザナギが声を掛けた。

イザナギ：ああ、なんて素敵な人なんだ！

イザナミ：まあ、なんて素敵な方なの！

こう言って交わると、次々に神々が生まれた。

＊女が積極的だとダメなのだ。ここでは“天浮橋”と“天御柱”が重要。

★黄泉（よみ）の国

・イザナミは、火の神である火之迦具土神（ホノカグツチノカミ）を生んだ時、大火傷を負い、涙を流し、吐き、大便や小便を漏らし散らして、苦しみぬいて亡くなってしまった。あまりの悲しみと怒りから、イザナギは剣を抜いて、生まれたばかりの火之迦具土神の首を斬り落とした。この時飛び散った血と、先にイザナミが吐き散らしたものや大便や小便から、金属の神や水の女神など、様々な神々が生まれた。（そんなものから生まれた神々って、一体…。）

イザナギはイザナミを蘇らす（黄泉帰らす）ために、黄泉の国へ出かけた。すると、入り口でイザナミが出迎えた。しかし、イザナミは黄泉の国の食べ物を口にして、そこの住人になってしまっていた。そこで、イザナミは黄泉の国の神に掛け合いに行った。ただし、待っている間、絶対中に入らないことを条件として。

イザナギは待ちきれなくなって奥に入っていくと、葬った時のままのイザナミの体が横たわっていた。美しかった姿は醜く腐り崩れ、蛆（うじ）がわいて、体の 8 ヶ所には蛇の姿をした雷神がじっとわだかまっていた。それを見て、イザナギは逃げ出した。約束を破って恥をかかせたイザナギにイザナミは怒り、八柱の雷神に黄泉の軍勢を差し向けさせたが、イザナギは剣を振り回しながらそこに生えていた桃の木の実を投げつけてやっと退散させた。最後に、イザナミ自身が追ってきた。一息ついていたイザナギは慌てて、そこにあった大岩で道を塞いだ。

*八尋殿、8 ヶ所、八柱の雷神など、8 が象徴的。ギリシャ神話に似ている。桃の木の実で悪霊退散だから、桃太郎はこれが原型か？

★アマテラスとスサノオ

・イザナギは、筑紫日向の橘の小門オドに行き、黄泉の国の穢れを払うため、禊を行った。身に着けているものを次々と脱ぐと、また、そこから神々が生まれた。川で禊ぎをしていて、左目を洗った時に生まれた神が天照大神（アマテラスオオミカミ）、右目が月読命（ツクヨミノミコト）、鼻が建速須佐之男命（タケハヤスサノオノミコト）である。イザナギは最後に生まれた三柱の神「三貴子」の誕生を知って非常に喜んだ。そして、天照大神に自分の首飾りを下賜し、高天原（たかまがはら）を治めるよう委任した。また、月読命には夜之食国、建速須佐之男命（素戔鳴尊）には海原を治めるよう委任した。

*ここでも三柱の三神。ただし、「三貴子」となっている点に注意。「貴子」とは（単数）男子のこと。天照大神は女神のはずなのに…。

・スサノオだけは母を亡くした悲しみで（イザナミから生まれていないのにも関わらず）、くる日もくる日もひどく泣きわめいていた。そのため、山の木が枯れ、海や河が干上がり、悪神がハエのようにウヨウヨと飛びまわって諸々の災いを起こした。そのため、高天原から追い出されてしまった。スサノオは本当に黄泉の国にいる母の下に行こうと考えた。しかし、黄泉の国に行ってしまったら、もう姉兄たちにも会えなくなるかもしれない。そこで、別れの挨拶のため、姉の治める高天原に昇って行った。

天に向かうと、山も川も、国全体が震え動いた。この様子を見て驚いたアマテラスは、高天原を奪いに来るつもりか、と思い、剣と弓矢を持って 1 人で弟を待ち受けた。そして足を踏み鳴らし、何のつもりで来たのか聞いた。（勇ましい女だ。）スサノオは説明したが、納得してもらえなかった。そこで、2 人で神に誓いを立てて子を作り、良い子が生まれたら潔白ということにしよう、と提案した。天の川を挟んで向い合い、アマテラスはスサノオの剣を口に含み、スサノオはアマテラスの勾玉を口に含んだ。それぞれを嚙んで吐き出すと、スサノオの予告した通りの子供が生まれ、高天原に迎え入れられた。

*剣と勾玉が、すでにここで登場している。スサノオは海神の筈なのに、これ

では荒ぶるシヴァ神だ。何故、山まで震えるのだろう。

★天の岩戸隠れと岩戸開き

・しかし、スサノオは姉に会って安心したのか、黄泉の国へ行くことはどうでもよくなり、心が奢って乱暴を働くようになった。田を荒らしたり、神殿の中に大便を撒き散らしたり。最初は大目に見ていたアマテラスも、ついに怒り心頭に発する出来事が起きた。

アマテラスと侍女が機織（はたおり）をしていた時、スサノオが皮を剥いだ馬を投げ込んだ。それに驚き、侍女はホト（女陰）を傷つけてしまった。（侍女ではなく、アマテラスとなっている場合もある。）怒りとショックから、アマテラスは天の岩戸の奥に“隠れた。”太陽の化身である彼女が“隠れて”しまったので、世界から昼は消えて暗黒に閉ざされて、悪神たちが闊歩し始めた。

高天原に属する八百万（やおよろず）の神々は、天の川の河原に集まって会議を開き、知恵の神・思金神（オモイカネノカミ）が作戦を立てた。

まずは鶏をたくさん集めて、岩戸の前で鳴かせた。次に伊斯許理度売命（イシコリドメノミコト）が大きな鏡＝八咫鏡（やたのかがみ）を、玉祖命（タマノオヤノミコト）が八咫瓊勾玉（やさかにのまがたま）を造り、天の香具山から採ってきた榊に飾って、天太玉命（アメノフトダマノミコト）が御幣（ごへい）を振り、天児屋根命（アメノコヤネノミコト）が祝詞（のりと）を唱えた。

その一方で、岩戸の前では天宇受売命（アメノウズメノミコト）によるストリップが行われた。女性器が見えるまで着物をずり下げて熱狂して踊る姿に、他の神々は大喜びでヤンヤの喝采である。岩戸の中に“隠れて”いたアマテラスは、あまりにも外が楽しそうなので、そっと岩戸を僅かに開けて顔を覗かせた。

「みんな、何をそんなに喜んでいるの？」

「あなたより尊い神が現れたので、みんな喜んで騒いでいるのです」

天宇受売命がそう言うと、天児屋根命と天太玉命が榊に掛けた八咫鏡をアマテラスに見せた。お前は…？アマテラスは鏡に映った自分を尊い神と勘違いし、もっとよく見ようと身を乗り出したところ、岩戸の陰に潜んでいた天手力男命（アメノタヂカラオノミコト）が手をつかみ、その怪力で引っ張り出した。そして、もう二度と“隠れる”ことがないように、天太玉命が注連（しめ）縄を張った。こうして世界に太陽が戻り、昼が復活した。

*有名な“天の岩戸隠れと岩戸開き”の場面である。何をおいても最重要。神道の根幹はここにあるといっても良い！

“隠れる”という表現は、今でも使われる。それは、天皇陛下が崩御された時で、“お隠れになった”と言う。つまり、“隠れる”という言葉にそのような意味が“隠されて”いるのである。

そう解釈すると、これには別の意味が“隠されて”いる。光の存在が“亡くなられて”闇が覆った。しかし、その後“復活”して光が戻った。そう、イエスの磔刑・復活の場面である！となると、天照大神はイエスのことか！？これは、＜日本の真相＞で明らかにする。（古事記では天照大御神、日本書紀では天

照大神。ここでは、天照大神とする。)

ここでのキーワードは、八咫鏡、八咫瓊勾玉、櫛、天太玉命、天児屋根命、天宇受売命、機織である。ここでもまた、これら三柱の神々が、アマテラスを外界にいざなったのである。よく覚えておいて欲しい。

また、天宇受売命がアマテラスの前で踊った＝神の御前で舞ったことが、神社で巫女が舞う神楽の元である。神楽とは“神が楽しむ”こと。

★天叢雲（あめのむらくも）の剣

・八百万の神々は再び会議を開き、スサノオのヒゲと手足の爪を抜いて追放した。スサノオは最初、朝鮮に降臨し、それから出雲の国に辿り着いた。側を流れる肥（ひ）の河を見ると、1本の箸が流れてきた。これは川上に誰かいる、と思って行ってみると、老夫婦とその娘だった。この国の神・大山津見神（オオヤマツミノカミ）の子の足名椎（アシナヅチ）、妻の名は手名椎（テナヅチ）、娘の名は櫛名田比売（クシナダヒメ）と言った。

しかし、夫婦は娘の前で泣いていたので、スサノオが訳を尋ねた。「この地には、8つの頭と尾を持つ八岐大蛇（やまたのおろち）という大蛇が棲んでおります。その目は赤いホオズキのように燃えて輝き、全身には苔や木が生い茂り、長さは8つの谷と8つの山を渡るほどで、腹はいつも血でただれたように赤くなっています。私たちには8人の娘がいましたが、大蛇が毎年決まった時期にやってきては一人ずつ娘を食べてしまい、とうとう櫛名田比売1人になってしまいました。今年もそろそろ大蛇の来る頃なので、泣いているのです」

見ると、櫛名田比売は大変美しい少女だった。スサノオは身分を明かすと、比売との結婚を条件に大蛇退治を引き受けた。

そこで、家の周りを垣根で囲んで8つの門を作り、その一つ一つに酒を満たした瓶を置いた。すると、大蛇の頭の一つ一つが瓶に頭を突っ込んで飲み始め、すっかり酔って眠りこんだ。その隙に、すかさず剣を持って躍り出て、大蛇をズタズタに切り刻んだ。その時、尾に何か手応えを感じた。そこから、1本の立派な剣が出てきた。以前の罪を償う思いもあり、大蛇の尾から出てきた剣をお詫びの印としてアマテラスに捧げた。大蛇の尾から出て来たので、この剣は「蛇の籠正（おろちのあらまさ）の剣」あるいは、八岐大蛇が現れる所にはいつも叢雲がたなびいていたので、「天叢雲（あめのむらくも）の剣」と名付けられた。スサノオは約束通り櫛名田比売と結婚し、宮殿を建てて地上を治めた。

*天叢雲の剣は後に「草薙の剣」と呼ばれるようになる「三種の神器」の1つ。ここでも蛇が関わっている。それと、8という救世主に関する数字。

★天孫降臨

アマテラスは「葦原中国（あしはらのなかつくに）一地上は、我が子の天忍穗耳命（アメノオシホミミノミコト）こそが治める国だ」と言った。天忍穗耳命は、アマテラスがスサノオの剣を口に含んで生み出した息子である。命を受けた天忍穗耳命は、天浮橋の上に立って下界を見下ろした。すると、大変騒々しい様子だったので、下界へ行くのが嫌になり、そのまま戻って来た。

再度、アマテラスと高御産巢日神から、天忍穗耳命に下界へ降りるよう命が下ったが、行きたくなかったので、次のように提案した。「下界へ降りる準備をしている間に、私には子ができました。この子、天津日高日子番能邇邇芸命（アマツヒダカヒコホノニギノミコト）を下界に降ろしましょう」

改めて、天照大御神と高御産巢日神から番能邇邇芸命に対して、地上を委任するという命が下った。つまり、アマテラスの孫、天孫である。

ところが、道中の八つ辻に、爛々と輝く大きな目で高天原から地上まで照らしている、異様な風体の神が立ち尽くしていた。その顔は赤く、鼻は太く長い。アマテラスと高御産巢日神は、天宇受売命を使者として送り出した。「お前は弱い女だが、敵に向かっても気後れしない性質だ。行って、何者か問いただして来なさい」早速、天宇受売命は謎の神の元へ向かった。胸をはだけ、着物を臍の下まで下げ、ホホホと笑いながら。「私は国津神、名は猿田彦神（サルタヒコノカミ）と申す。天神の御子が天下りされると聞き、先導いたそうと思ってお迎えにあがった」箒絡された猿田彦の言葉に、アマテラスと高御産巢日神も安心し、ついに“天孫降臨”が始まった。

アマテラスは番能邇邇芸命に、かつて自分を岩戸から引き出した八尺瓊勾玉と八咫鏡、そして八岐大蛇の尾から出た天叢雲の剣を渡し、「この鏡を私の魂だと思って大事に祀れ」と言った。

番能邇邇芸命は、久士布留（くじふる）岳に降り立った。護衛は弓矢と太刀を持った天忍日命（アメノオシヒノミコト）と天津久米命（アマツクメノミコト）の二神が務めた。また、お伴として天太玉命、天児屋根命、天宇受売命、伊斯許理度売命、玉祖命が従っていた。彼らは、それぞれ 5 つの職業集団の長として職を分担し、その祖となった。この他にも、知恵の神である思兼神が政治担当として従い、更に、かつてアマテラスを岩戸から引っ張り出した手力男神、門の守護神である天石門別神（アメノイワトワケノカミ）、食べ物の神である登由宇気神（トユウケノカミ）が従い、それぞれの場所に鎮座した。

* “天孫降臨”があったからこそ、現在の天皇家がアマテラスの子孫であるという証である。故に、ここも極めて重要。天孫降臨を命令したのは、アマテラスと高御産巢日神である。

天浮橋とは、天界と下界を結ぶ梯子のことであり、神々が行き来する。原型はヤコブの階段（梯子）か？天浮橋が倒れたものが、京都の丹波地方にある有名な天橋立である。

また、天孫降臨の際に、アマテラスが番能邇邇芸命に渡した「八尺瓊勾玉」「八咫鏡」「天叢雲の剣」は後に「三種の神器」と呼ばれ、王権を継承する印である。すなわち、「三種の神器」を保持する者が、日本では“天皇”と言われているのである。現在、八尺瓊勾玉は皇居に、八咫鏡は伊勢神宮内宮に、天叢雲の剣は（何故か天皇に関係なさそうな）熱田神宮に祀られている。ここでも 8 である。なお、どこかにも三種の神器が登場した。そう、「十戒石板」「マナの壺」「アロンの杖」である。実は、共に関係がある！

“高天原から地上まで照らす”猿田彦とは、“天を照らし、国を照らす”ことだから、「天照国照猿田彦」とも表現できる。

また、ここでも天宇受売命が重要な役を買っている。実は、天宇受売命の“魅力”にイカレタのか、猿田彦は天宇受売命と結婚したのである。猿田彦が天孫降臨の際に導いたことから、夫婦で同祖神として祀られるようになった。そして、天宇受売命は「猿女君（サルメノキミ）」という名前に変更した。逆に、猿田彦が「宇豆彦（ウズヒコ）」と言われることもある。

また、“猿”は“申”とも書き、これが“示せ”ば“神”となる。それ故、神楽の俗っぽいものということで、狂言的な踊りや舞を申楽といい、これが猿楽と表記されるようになった。そして、猿楽は発展して能楽となった。能楽の祖は秦氏である！

お伴となったのは、天太玉命、天児屋根命、天宇受売命の三柱プラス伊斯許理度売命、玉祖命の五柱の神。ここでも“3 と 5”である。そして、天太玉命、天児屋根命、天宇受売命の三柱は後の祭司支族の祖先である。天太玉命は忌部（いんべ）氏、天児屋根命は中臣氏、天宇受売命は猿女君である。

猿女君は先ほどの通りであり、中臣氏は言うまでもなく中臣鎌足の祖先で、その末裔は藤原氏、そして忌部＝斎部氏こそが祭司の中の祭司である。“忌”という文字は、忌中などのように、人の死に関係がある。この文字を嫌い、“斎部”として“いんべ”と読ませる姓もある。死者を葬る場所は斎場である。これからも、“斎”と“忌”は同義語であることが解る。つまり、忌部氏とは、人の死に関する儀式を執り行う祭司一族のこと。実は、秦氏の中の秦氏なのである！

護衛の二柱神は、弓矢と太刀を持っていたが、これは相撲の太刀持ちや露払いに似ている。

★海幸彦と山幸彦

・番能邇邇芸命と佐久夜毘売の間の子、火照命（ホデリノミコト）、火遠理命（ホオリノミコト）は、2人で一緒に暮っていた。兄の火照命は「海幸彦」と名乗り、海の獲物（さち）を捕り、弟の火遠理命は「山幸彦」と名乗り、山の獲物を獲っていた。

ある日、山幸彦は海幸彦に、各々の道具を取り替え、獲物も替えることを提案した。最初のうちは拒否していた海幸彦であったが、とうとう根負けして、ほんの僅かな間だけ取り替えることにした。

こうして、山幸彦は兄の漁具を持って、意気揚々と海に出かけて行っただが、まったく釣れず、更に、大事な釣り針を海に失くしてしまった。それを告げると海幸彦は怒り、釣り針を返すことを要求した。それで、山幸彦は持っていた大剣（十拳剣、とつかのつるぎ）を潰して五百（たぐさん）の釣り針を作って兄に償おうとしたが、受け取ってもらえなかった。更に千（もつとたぐさん）の釣り針を作ったが、海幸彦はやはり受け取らず、元の釣り針を返すよう要求した。

兄に許してもらえず、山幸彦が海辺で泣いて悲しんでいると、1人の老人がやって来た。塩椎神（シオツチノカミ）、すなわち潮の流れ＝航海を司る神であつ

た。その神が訳を尋ねると、山幸彦は経緯を説明した。塩椎神は「御子様のために良い策謀をいたしましょう」と言って、袋から櫛を取り出した。それを投げると、たちまち竹が生え出て竹林になった。塩椎神はその竹を伐って、目の詰まった籠に編んで小舟を造り、それに山幸彦を乗せて、こう教えた。「私がこの舟を押し流したら、しばしお待ち下さい。よい海路（みち）がございます。その路に乗って流れて往きますと、魚の鱗のごとき造りの宮殿があります。それは綿津見神（ワタツミノカミ）、海神の宮です。その神宮の門に到りましたら、傍らの泉のほとりに繁った桂の木があります。その木の上に座っていれば、海神の娘が見つけて、良きように取り計らってくれるでしょう」教えられた通りに少し行ってみると、すべてその言葉の通りになったので、山幸彦は言われた通り桂の木の枝に座った。

そこに、海神の娘・豊玉毘売（トヨタマヒメ）の下女が、美しい器を持って水を汲みにやって来た。すると、泉に影が映っており、美しい男＝山幸彦が座っていた。山幸彦はその下女を見て、水を飲ませてくれるよう頼んだ。下女はすぐに美しい壺に水を汲んで差し出した。すると、山幸彦は水を飲まず、首飾りの珠を外して口に含み、壺に吐き出した。すると珠は壺にくっついて、とれなくなった。それで、そのまま豊玉毘売のところに持って行った。豊玉毘売は珠を見て下女に尋ねた。「もしや、誰かが門の外にいますか？」「とても美しい男です。我が王にも増して大変尊い方ようです。その方が水を所望されたので、水を差し上げましたが、水を飲まずにこの珠を吐き入れられました。それを取ることが出来ませんでしたので、入れたまま持ってきたのです」豊玉毘売は興味をひかれ、宮を出て山幸彦を見てたちまち恋に落ち、将来の契りを交わした。そうして、毘売は父の綿津見神に告げた。「我が家の門に、美しい人が来ております」海神は自ら宮を出て見て、「この人は天津彦（アマツヒコ）の御子、天空の御子様だ」と言って、すぐに宮中に招き入れた。アシカの皮の敷物を8枚敷いて、絹の敷物8枚をその上に敷き、その上に座らせて、数多くの台に載せた品物（結納品）を供えご馳走して、娘の豊玉毘売と結婚させた。こうして、3年間、山幸彦はこの国に住んだ。

ある時、山幸彦は大きなため息をついた。事の始まりを思い出したからである。豊玉毘売は夫のため息を聞きつけて、父に言った。「3年一緒に暮しましたが、普段ため息などついたことがないのに、昨夜は大きなため息をついておられました。もしや、何か悩み事があるのではないのでしょうか」（ため息だけで心配するとは、健気な女性よ。）早速、父親の海神が次のように尋ねた。「今朝、我が娘が語るのを聞けば、『3年一緒に暮したが、普段ため息などついたことがないのに、昨夜は大きなため息をついていた』と言う。何かわけがあるのではないか。また、あなたがここに来た理由は何なのだ？」（3年も経っているのに、理由も聞いていなかったのか？）

山幸彦は、すべてを話した。これを聞いて、海神は海の魚たちを呼び集めて、その釣り針について尋ねた。すると、鯛の喉に釣り針が引っ掛かっており、すぐに取り出されてきれいに洗い清められ、山幸彦に渡された。渡す時、綿津見

神は山幸彦にこう教えた。「この釣り針を兄に返すとき、『この釣り針はふらふら針、暴れ針、貧乏針、間抜け針』と呪文を唱えて、後ろ手に渡しなさい。そうして、兄が高いところに田を作ったらあなたは低いところに、低いところを作ったら高いところに作りなさい。そうすれば、我は水を司るので、3年の間、必ず兄の田を不作にして困窮させてやります。もしも兄がそれを怨んで攻めてきたら、塩盈珠（しおみつだま）を使って溺れさせなさい。もしも反省したなら、塩乾珠（しおひるだま）を使って生かしてやりなさい。このように悩み苦しめてやるのです」そして塩盈珠という潮を満ちさせる宝珠と、塩乾珠という潮を干かせる宝珠を授けた。

それから、綿津見神はワニザメたちを呼び集めて尋ねた。「今、天津彦の御子、天空の御子様が地上に帰ろうとしておられる。誰が幾日で、送り帰って我に報告できるのか」そこで、ワニザメたちはそれぞれ、自分の体の長さが何尋あるかをそのまま日数にして答えた。その中に一尋の長さのワニザメがいて、「私は一尋（ひとひろ）なので、一日（ひとひ）で送ってすぐに帰って来られます」と言っただので、「ならば、お前が送って差し上げなさい。海の中を通る時、怖がらせないように」と注意して、すぐにその一尋ワニザメの首に山幸彦を乗せて地上に送り出すことになった。

いよいよ出発という時、豊玉毘売が山幸彦に言った。「私は身籠もっております。必ず近々、波の高い日に、あなたの御子を産むため、あなたのお国の海辺へ参ります。どうか、産屋を造って待っていて下さい」こうして妻に見送られて出発した山幸彦は、1日のうちに地上に着いた。そのワニザメが帰ろうとした時、山幸彦は、身に付けていた小刀の紐を解いて、ワニザメの首にかけてやった。それで、その一尋のワニザメは、「佐比持神（サヒモチノカミ、刀を持つ神）」と呼ばれるようになった。

山幸彦は兄の元に帰ると、綿津見神に言われた通りにして釣り針を返した。すると海の獲物は捕れず、おまけに、兄が高いところに田を作ると日照になって弟の低い田にだけ雨が降り、兄が低いところに田を作ると雨が川上に降って増水し、低い兄の田だけ水浸しになってしまった。収穫は無く、だんだん貧乏になって、前よりもっと厳しく弟にあたるようになった。最後には、弟に襲いかかったが、山幸彦は海神にもらった塩盈珠を使って水攻めして溺れさせ、兄が降参すると、塩乾珠で助けた。海幸彦は頭を下げて言った。「今より以後は、私はお前の昼夜の護衛として仕えよう」こうして、海幸彦の子孫・隼人族（薩摩隼人？）は山幸彦の子孫・天皇家の護衛として仕え、海幸彦が溺れさせられた時の様子を演じて朝廷に奉ることになった。これを隼人舞いと言う。

海が荒れて波の高いある日、約束通り、豊玉毘売が大亀に乗り、妹の玉依毘売（タマヨリヒメ）を伴って、自ら地上にやって来た。「私は身籠もり、産み月になりました。そこで思いますに、天津神の御子は海原で産むものではありません。ですから参上いたしました」

そこで、すぐに渚に鶺鴒の羽根を屋根にした産屋を造った。鶺鴒の羽根には安産

の魔力がある。ところが、屋根をまだ全部葺（ふ）いてしまわないうちに陣痛が始まってしまったので、未完成の産屋に入った。まさに産もうとする時、夫に向かって言うには、「全て異郷の者は、出産の際には本国での本来の姿になって産みます。ですから、私は今、本来の姿でもって産もうとしています。願わくば、私を見ないで下さい」山幸彦はかえって怪しいと思い、産屋の戸を押し開いて出産の様子を覗いて見ると、毘売は八尋の大きさのワニザメになって、はいずりうねっていた。驚き畏れて、山幸彦は逃げてしまった。覗かれたことを知った豊玉毘売は恥じ入り、「私は今まで、これからも海路を通してあなたの元に通いたいと思っていました。しかし、私の本当の姿を垣間見られてしまっでは、どうして再び夫婦の情を結ぶことができますでしょうか」と言うなり海に入って、海の宮に帰ってしまった。これで、海の国と地上の国を結ぶ道の境は閉ざされ、2つの世界は永遠に断絶した。

渚には赤ん坊が残されていた。このような経緯から、この御子は波限建鵜葺草葺不合命（ナギサタケウガヤフキアエズノミコト、渚に建てた産屋の鵜の羽根の屋根を葺き終えないうちに生まれたお方）と名付けられた。天の神、山の神、海の神、すべての領域の神の血を束ねた、地上の王の血筋の誕生である。

波限建鵜葺草葺不合命は、地上に残った玉依毘売が母代わりに育てることになった。山幸彦こと火遠理命は、580歳で亡くなるまで高千穂の宮に暮した。一方、息子の波限建鵜葺草葺不合命は成長し、後に叔母であり育ての母でもある玉依毘売と結婚し、4人の男児を産んだ。

*山幸彦の首飾りの珠は勾玉であるが、それが壺にくっついて取れなくなったことは、両者が同じものであることを暗示している。

アシカの皮の敷物を8枚、絹の敷物8枚、八尋の大きさのワニザメ、住んだのが3年間ということで、象徴的な8と3。

それに、叔母であり育ての母でもある女性と結婚するのは、明らかに近親相姦である。何が言いたいのか？

★神武天皇

・波限建鵜葺草葺不合命と玉依毘売の間には、五瀬命（イツセノミコト）、稲氷命（イナヒノミコト）、御毛沼命（ミケヌノミコト）、神倭伊波礼毘古命（カムヤマトイワレヒコノミコト）の4人の息子があつた。父の後を継いだのは、末の弟のイワレヒコだった。ある時、イワレヒコは高千穂の宮で兄弟と子供たちに相談した。「遙か昔、アマテラスと高御産巢日神は、我等の曾祖父・番能邇邇芸命にこの国を授けた。まだ暗闇の中にあつたこの国を代々の父祖たちは治め、恩恵を与えたが、未だ国の全てに行き渡っているわけではない。また、塩椎神に訊けば、東方に青い山々に囲まれた良い土地があるという。思うに、そこそが国の中心であり、天下を治めるに相応しい場所だろう。そこに都を造ろうではないか」

一族は賛成し、早速、軍勢を率いて日向を出発し、豊国の宇沙（大分県宇佐市）を経て筑紫へ。それから瀬戸内海沿いに東上して、安芸の国（広島県辺り）

と吉備（岡山県）、浪速（なみはや＝難波）と進み、河内国（大阪府）の青雲の白肩津（しらかたつ）という川原に停泊した。一行は上陸し、進軍を開始したが、ここには那賀須泥毘古（ナガスネヒコ）という神が軍勢を率いて待ち構えていた。矢を射掛けられ、イワレヒコたちは盾で防ぎながら応戦した。

これだけ苦戦するのは、日の神の御子として日に向かって戦うのは間違いだった、ということに気づき、撤退して南に廻り、紀伊半島に上陸した。しかし、再び海を渡ろうとすると、暴風に阻まれた。兄弟全員を失ったイワレヒコは、息子の手研耳命（テギシミミノミコト）と共に軍勢を率いて熊野村に到ると、ふいに巨大な熊が現れ、たちまち消えた。すると、イワレヒコは目が眩み、気力がうせ、軍勢もろとも 1 人残らず気を失って地に倒れ伏した。熊は、この地を守る荒らぶる土地神だった。侵略者であるイワレヒコの一行に神罰を与えたのである。

その時、熊野の高倉下（タカクラジ）という男が、一振りの太刀を持ってやって来て、それを倒れているイワレヒコに差し出すと、すぐさま目を覚まして起き上がり、その太刀を受け取った。すると、熊野の山の荒らぶる神々は勝手にみんな斬り倒されたと同時に、気を失っていた軍勢もみな、目を覚まして起き上がった。この太刀の名を布都御魂（ふつのみたま）などと言い、後に石上神宮（いそのかみじんぐう）に祀られた。

熊野を下し、更に奥地へ進もうとしたが、道は陰しく山は深く、行く手が阻まれた。しかし、アマテラスと高御産巢日神が遣わした 3 本足の大きな鳥「八咫鳥（やたがらす）」の導きにより、再び那賀須泥毘古の軍と最後の決戦をすることとなった。しかし、戦いは長引き、勝敗はなかなか決しなかった。

その時、にわかに空がかき曇ると、雹が降り出した。と同時に、天から「金鵄（きんし、金色のとび）」が舞い降りて来て、イワレヒコの弓の先に留まった。その光は雷光のようであり、その威容の前に、那賀須泥毘古の軍は恐れ惑わされ、力を失ってしまった。追い詰められた那賀須泥毘古は、イワレヒコに使者を送って言った。「その昔、天津（アマツ）神の御子が天の磐舟に乗って天降られた。御名を邇芸速日命と言われる。我らは邇芸速日命に仕えている。天津神の御子は 2 人おられるのか。どうして天津神の御子と名乗って人の土地を奪おうとする。私が思うに、お前は偽物なのだ！」イワレヒコは「天津神の御子は数多くいる。お前が主と崇める者が真に天津神の御子ならば、必ずその印があるはずだ。それを示してみよ」と答えると、那賀須泥毘古は邇芸速日命の持つ神器、天の羽羽矢（ははや）と歩鞞（かちゆき、携帯用の矢筒）を示した。本物と確信したイワレヒコは、自分の持っていた羽羽矢と歩鞞を那賀須泥毘古に示した。曾祖父の邇邇芸命が高天原から持ってきたものであり、邇芸速日命のものとそっくりだった。

実は、邇芸速日命は邇邇芸命の兄なのだ。邇邇芸命が降臨を命じられた時、兄はどこに消えていたのかと思いきや、彼も降臨していたのである。邇芸速日命は磐舟で天空を駆け巡り、この地を巡り見て河内の山に降り、後に大和の鳥見（とみ）に落ちついた。そこに住んでいた那賀須泥毘古こと登美毘古（トミヒコ）を服属させ、彼の妹の登美夜毘売（トミヤヒメ）を妻としたのである。

更に、熊野でイワレヒコに神の太刀・布都御魂を渡した高倉下は、邇芸速日命が高天原にいた頃に産まれた彼の息子で、父に従って天下っていたのである。

互いに天孫であることが判ったものの、既に戦いは止めることが出来ないとこまできていた。那賀須泥毘古は、イワレヒコが本物の天津神の御子だと認めはしたが、自分の主のためにあくまで戦おうとしたのである。

しかし、彼が命がけで守ろうとした主・邇芸速日命は、それを良しとしなかった。彼は、天津神が本当に気にかけているのは、邇邇芸命の子孫だけだと知っていたのである。邇芸速日命は那賀須泥毘古を殺し、残った部下と共にイワレヒコに帰順した。イワレヒコは、邇芸速日命を臣下に加えて寵愛した。そして、イワレヒコが東征に出発してから、何年もの年月が流れていた。「天津神の御威光のおかげで、凶徒は制圧することが出来た。周辺の地はまだ平定されたわけではないが、国の内は静かだ。都を開き、御殿を造ろう。思うに、かの畝傍山（うねびやま）の東西の橿原（かしはら）の地が国の中心だろう。ここに都を造ろう」

イワレヒコは宮を作り、正妃を迎え、辛酉年の春 1 月 1 日、天皇（スメラミコト）の元年、橿原宮で即位した。西暦で BC660 年のことである。この時を現在の日本建国の皇紀元年とした。そして、約 137 歳でイワレヒコは亡くなった。後の人々は、イワレヒコのことを“神武天皇”と呼ぶようになった。

*神武天皇と皇紀の由来である。昔は、このようなことを知らないと“非国民”と呼ばれたのである。よく話題になるのが神武東征伝説についてであり、神武天皇とはアレキサンダー大王のことだとか、そうではないとか。しかし、後の九州生まれの第 15 代応神天皇も、まったく同じ経路を辿って畿内に入り、大和朝廷を開くのである。

ここで特に重要なのは、「八咫鳥」と「金鵄」である。アマテラスと高御産巢日神が遣わした 3 本足の大きな鳥が「八咫鳥」である。またまた、3 と 8 である。“咫”とは長さの単位で、1 咫＝4 寸＝約 18 センチである。よって、八咫＝約 1.5 メートルとなり、かなり大きい。そんな鳥がいるのか？神話だから、良いのである。神話の中の話を本当かどうか、というのはナンセンスである。何かの象徴、と思わなければならない。

鳥はアレキサンダー大王を導いた。中国では、太陽には鳥が住み、10 個の太陽がそれぞれ天を駆け巡って一つの旬を形成すると考える。（これが上旬、中旬、下旬の意味である。）ある時、太陽が一度に天に現れ、地上は灼熱と化した。天帝に命じられた弓の名手が 9 個の太陽を射落とすと、9 羽の「金の鳥」が落ちてきて、足が 3 本だった。

ということから、アマテラス＝太陽神の子孫が東征するには、鳥が最適なのである。“八咫”は当然「八咫鏡」に関連付けている。そして、「八咫鳥」は黒い鳥だから、あとで出てくる「金鵄」で「金の鳥」に関連付けている。

そして、「金鵄」が登場する時、空がかき曇って雹が降り出した。雹に雷は付きものである。「金鵄」の光は雷光のようであったのだ。登場する時、雷雲と稲

妻を伴ったのは、ヤハウエである！

なお、天皇をスメラミコトと読む理由は書かれていない。スメル＝シュメール由来か？ちなみに、天皇の諡号（しごう）には、漢風諡号と倭（わ）風諡号がある。“神武天皇”は漢風諡号であり、“神倭伊波礼毘古天皇”は倭風諡号である。神武天皇の別倭風諡号には、始馭天下之天皇（ハツクニシラススメラミコト）がある。また、同名の倭風諡号を持つ天皇として、御肇国天皇（ハツクニシラススメラミコト）＝崇神天皇（第10代）＝御間城入彦五十瓊殖天皇（ミマキイリビコイニエノスメラミコト）が居る。名前を見て解るように、神々の名前の漢字は当て字であるが故に、ほとんど意味は無い。よって、「読み」が重要となる。とすれば、神武と崇神は同一人物となる。そして、漢風諡号でも、「神」という字が共通で使われている。実際、神武－崇神－応神の3天皇は、古代天皇の中で、別格的に扱われているのである。応神天皇にも「神」がある。これには何かある。

★ヤマトタケルと草薙の剣

・神武天皇から数えて12代目、後に景行天皇と呼ばれる大帯日子淤斯呂和氣天皇（オオタラシヒコオシロワケノスメラミコト）の時代、土蜘蛛（大和に従わない部族・郎党）や、幾度も反乱を繰り返す熊襲（くまそ、南九州に住む大和の服属部族）という連中がスメラミコトに反抗していた。スメラミコトには多くの子がいたが、故あって、小碓命（オウスノミコト）は双子の兄である大碓命（オオウスノミコト）を殺してしまった。スメラミコトは、そのような激しく荒々しい気性を恐ろしく思い、なんとか小碓命を遠ざけようとして、こう命じた。「西方に、熊襲の猛者（クマソタケル）が2人いる。これらは我が大和に従わず、礼儀を知らない者どもである。よって、その者どもを討ち取って参れ」この時、オウスはまだ16歳。伊勢神宮に斎宮として仕えていた叔母の倭比売命（ヤマトヒメノミコト）は、オウスに餞別として（何故か）女物の着物と、祀られていた宝刀を与えた。

熊襲の警戒は厳重だったが、ある時、屋敷の新築祝いが開かれることになった。オウスはその時を狙った。オウスは結っていた髪を垂らし、叔母からもらった服を着て少女の姿となり、宴の様子を伺って、女たちの中に混じって中に入った。宴は盛り上がり、夜が更けた頃には、そろそろ人もまばらになり、猛者らも酔いが回ってきていた。いきなり、オウスは兄の猛者の襟をつかんで引き寄せると、隠し持っていた宝刀で胸を突き通した。それを見て弟の猛者は逃げ出したが、階段の下で背中 of 皮をつかんで捕まえると、後ろから宝刀を突き立てた。瀕死の猛者は、自分たちよりも強いこの者にタケルの名を譲り、「倭建（ヤマトタケル）」と名付けた。こうして、オウスは倭建命（ヤマトタケルノミコト、日本武尊）と呼ばれ、その名を称えられるようになった。

大和に帰ると、スメラミコトはまたも、「東方12国の荒ぶる神・従わぬ者どもを従わせて参れ」と命じ、討伐を命じた印としてヒイラギで作った長い矛を

与えた。熊襲討伐の際に叔母の倭比売命からもらった着物が役に立ったので、タケルは出発する時、また伊勢神宮に寄った。倭比売命は、神宮に祀られてあった神剣を授けた。この神剣は天叢雲の剣である。また、「もしもの場合にこの袋の口を開きなさい」と言って袋も渡した。

こうして出発し、尾張国に着くと、川で布を水に晒している少女がいた。彼女は美夜受比売（ミヤヅヒメ）と言い、この地を治める豪族の娘で、神武天皇に神剣・布都御魂を献じた高倉下の子孫である。タケルは彼女の家泊まり、彼女と結婚しようかと思ったが、帰り道にまた寄って、その時結婚しようと思いを直した。そして、彼女と婚約を取り交わして東へ旅立つと、山河の荒ぶる神々や従わない人々をことごとく降伏させ、和平を結んでいった。

やがて、相模国に入った時、そこの国造（くにのみやつこ）が偽って言った。「この野の中に大沼があります。その沼の中に住む神は、大変、靈威のある神です」それで、タケルがその神を見ようと野に入った時、国造が野に火を放った。騙されたと気づいた時には、辺り一面火の海であった。進退極まったタケルは、叔母から渡されていた袋のことを思い出した。袋を開けると、中には火打石が入っていた。火攻めにあっているのに火打石か？

その時、タケルが持っていた神剣・天叢雲の剣がひとりでに鞘から抜け出し、辺りの草を薙ぎ払った。（神武の時も、神剣・布都御魂が勝手に相手を斬り倒した。）タケルは薙ぎ払われた草に火打石で火をつけると、燃え進んでくる火はそこで食い止められ、火勢も弱くなった。いわゆる“向かい火”戦法である。タケルは燃える野から生還すると、騙した国造たちを斬り滅ぼし、火を放って焼き払った。

この時、剣がひとりでに草を薙いだので、以降、天叢雲の剣は「草薙の剣」と呼ばれるようになった。また、焼き払った野は“焼津”と呼ばれるようになった。

帰途、美夜受比売との結婚を果たした後、タケルは「草薙の剣」を妻のもとにおいて、伊吹山の神を討ち取りに出かけた。しかし、油断して敗れ、鈴鹿で命を落とし、美夜受比売のもとに戻ることはなかった。その後、美夜受比売が小社を建てて「草薙の剣」を祀ったのが熱田神宮の起源であると言われている。

＊有名な焼津の話。これで「天叢雲の剣」→「草薙の剣」となった理由が解ったでしょう。また、「草薙の剣」と「熱田神宮」の関係も。元は、伊勢神宮にあったのだ。しかし、何故「三種の神器」の1つが、神武を助けた高倉下の太刀「布都御魂」ではなく、「草薙の剣」なのだろうか。

なお、ヤマトタケルは神武天皇から数えて12代目で、熊襲征伐が16歳の時という、象徴的な数字。12はイスラエル12支族とイエスの12人の使徒、16は天皇家の16紋菊か？

★番外の重要な話（真っ赤な丹塗矢、朱塗矢伝説。謎を解く鍵。）

これには、いくつかのバージョンがあるので、紹介する。

・古事記バージョン

三島湊咋（ミシマノミゾクヒ）という男に、勢夜陀多良比売（セヤダタラヒメ）というたいそう美しい娘があった。ある日のこと、比売が厠（川の上に板を渡して作ってある天然水洗トイレ）で大きい方の用を足していると、突然、何かが比売のホトに突き当たった。驚き、立ち上がって走り出て見ると、「真っ赤な丹塗矢」であった。比売はそれを持ち帰り、床の間に置いた。すると、夜になって矢が美しい男に変わった。実は、その矢は、三輪山に住む大物主神（オオモノヌシノカミ、別名大国主神＝櫛髮玉命＝大己貴神＝八千矛神＝大黒様）の変身だったのである。神は比売を一目見て好きになってしまい、矢に変身して川を流れてきたのである。（コスプレストーカーだ。）大物主神と勢夜陀多良比売は契りを結び、2人の間に生まれたのが富登多多良伊須須岐比売（ホトタタライススギヒメ）であり、後に神武天皇の皇后となった。

*まあ、何と言うか…。皇室の大元が、トイレでレイプとは…。しかも、生まれた子の名前も、「ホト（女陰）」だなんて。親は何を考えているのだろう。さすがにこれではひどいと思い、後に比売多多良伊須気余理比売（ヒメタタライスケヨリヒメ）と改名している。この大らかさが、後に「源氏」などが創作される背景となっているのである。

・山城国風土記バージョン

「八咫鳥」にして賀茂氏の祖、賀茂建角身命（カモタケツヌミノミコト）の妻に、丹波の国の伊可古夜比売（イカコヤヒメ）が居た。彼女は2人の子を生んだ。玉依彦と玉依姫である。

ある日、玉依姫は石川の瀬見の小川で遊んでいると、川上から真っ赤な丹塗矢が流れてきた。不思議に思った玉依姫は拾い上げ、家に持ち帰ると、床の間に置いた。それからしばらくして、玉依姫はひとりでに懐妊し、立派な男の子を産んだ。しかし、誰が父親なのか、まったく検討がつかない。

そこで、賀茂建角身命は一計を案じた。その子が7歳となると、全国の神を招待して7日7晩にわたる祝宴を開き、孫に向かって、父親に酒を飲ませるよう言った。

すると男の子は、父親は地の神ではなく天におはす火雷神（ホノイカツチノカミ）である、と言って、天井を突き破り、空高く昇って行った。これに因み、男の子は「賀茂別雷命（カモワケイカツチノミコト）」と改名され、上賀茂神社の主神として祀られるようになった。また、祖父の賀茂建角身命と母親の玉依姫は、下鴨神社の主神として祀られるようになった。そのため、下鴨神社の正式名を賀茂御祖（かもみおや）神社、上賀茂神社の正式名を賀茂別雷（かもわけいかづち）神社と言う。

*「裏神道」に於いて最重要の神社である下鴨神社と上賀茂神社の由来である。この由来からして、格としては下鴨の方が上である。上賀茂神社に行った時に、この話をしてくれたが、ちょいと内容が違っていた。丹塗矢を川で拾ったのではなく、玉依姫が寝ている間に、丹塗矢が枕元に落ちてきたのである。そ

の様子を特別公開の部屋に日本画で描かれていた。古事記版だったら、どれほど、おもしろいことか…。(そんなの、神主がまじめな顔して説明できん。)

・松尾大社バージョン

山城国風土記と似ているが、丹塗り矢が流れてきたのは葛野川で、懐妊した玉依姫が秦氏の娘！となっている。

*これら 3 つのバージョンを合わせてみると、矛盾していることに気づく。まず、古事記と山城国風土記では、懐妊したヒメの名前が異なる。また、古事記では生まれた子は女の子で、後の神武天皇の皇后、山城国風土記では男の子で、父親が火雷神。そして、山城国風土記では玉依姫は賀茂氏なのに、松尾大社では秦氏である。さて、この矛盾を解く“鍵”は…。

また、ここでも玉依姫が出てきたが、それは山幸彦の話では、海神の娘であり、波限建鵜葺草葺不合命の叔母でもあり、育ての母でもあり、妻でもあった。そして、波限建鵜葺草葺不合命は神倭伊波礼毘古命＝神武天皇の父親であった。とすると、火雷神＝波限建鵜葺草葺不合命＝大物主神＝大黒様であり、火雷神の息子＝賀茂別雷命＝波限建鵜葺草葺不合命の息子＝神武天皇ということになる。また、海神＝賀茂建角身命＝賀茂氏の祖＝秦氏！ということにもなる。

更に、古事記では生まれた子が女の子で、神武天皇の皇后となったのだから、賀茂別雷命＝神武天皇＝富登多多良伊須須岐比売＝神武天皇の皇后となり、何と、神武天皇とその皇后が同一人物となってしまった！！

これでは、親子関係、兄弟関係、性別などがハチャメチャであり、また、最初の三神などは古事記と日本書紀では名前も違う。よって、古事記も日本書紀も偽書であり、何も信頼に値するものはない、と言えそうだが、アカデミズムでは、単なる神話での話として“正書”だの“偽書”だのという議論は無い。

しかし、これこそが日本神話、古代日本、天皇家、神社、神道の封印された真相を解く鍵なのである！

古事記と日本書紀は、このような神話の時代よりも遙か後世、天武天皇の命令により編纂されたのである。普通、神話というものは遙か昔から受け継がれるもの。それなのに、天武天皇の時代に編纂？これには、何かある。

また、「朱塗り矢伝説」で示されるように、古事記と日本書紀だけ読んでいても、真相は解明できないのである。山城国風土記のような資料も必要なのである。すなわち、日本神話、古代日本、天皇家、神社、神道の封印を解くためには、あらゆる資料を調査しなければならない、ということを意味しており、簡単には近づけないのである。

これらの謎を解く鍵は、天皇家よりも古い家系図（国宝）！を有する京都・天橋立の袂にある籠（この）神社にある。そう、神々が天と地の間を行き来していた梯子の袂である。

籠（かご）と言えば、「海幸彦と山幸彦」の話で塩椎神が竹を伐って目の詰まった「籠」を編んで小舟を造り、それに山幸彦を乗せた、という話があり、海神にも纏わるし、モーゼ誕生の話にも似ている。また、籠は籠目。籠目とは竹で籠を編んだときにできる目の形のことで、六芒星、すなわちダビデの星の形なのだ！真相解明は＜日本の真相＞で！

参考著書：

・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。

初版：2006 年 8 月

改定 3 版：2008 年 1 月

改定 4 版：2012 年 12 月